
看護部の訓練から職業横断的な訓練実施まで

(山崎達枝：災害時のヘルスプロモーション、東京、荘道社、2010、17-28)

2014年7月4日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

東海・南海・東南海地震の発生が予測され切迫性を有している今、医療施設の役割としては、災害時に減災に向けて職員全員が対応できるように、組織としての対応と職員への教育・訓練を行うというハード・ソフトの両面から備えておくことが急務である。

筆者が臨床にいた都立広尾病院では、平時に「災害に強い病院を目指し被災時でも診療機能を維持・拡大できる体制を構築すること」を目標に掲げており、看護部としてその組織目標を達成するには、全看護職員が「災害医療・災害看護についての知識・技術を習得しなければならない」と考え、研修・訓練に力を注いだ。

これまでの医学部や看護基礎教育では、災害医療・災害看護の知識や技術を学ぶ機会が少なく、医療従事者の災害に対する知識はかなり低い。そこで、災害体験や災害についての知識の少ない職員の一人一人に疑似体験をさせ、その疑似体験から課題を見つけて解決方法が見出されるようにあらゆる災害を想定して様々な条件を設定し、講義から机上のシミュレーション、演習へと段階的なレベル別の研修・訓練プログラムを取り入れた。講義では、被災経験があまりない、災害現場の現状がわからない人が災害現場を理解できるように視聴覚教材を多く利用し、災害現場の臨場感が持てるようにしている。またこの研修は、演習時間を多く取り入れ、研修生が自ら考えながら自主的に課題を展開していけるような研修・訓練内容にする、経験から学んだ経験知に理論と疑似体験を組み合わせることでより実践に近い研修にするなどの多くの工夫がなされている。

筆者の経験から、災害教育研修・訓練では、災害看護の視野が広げられる、二次災害につながると予測されることに事前に対処できる、「転ばぬ先の杖」のような研修が必要であり、看護職員はこのような研修を断続的・継続的に行っていくべきである。

しかし、病院内の研修室における集合型研修への参加を呼びかけても、日々多忙な勤務時間内の参加は困難であるのが現状である。筆者の病院の場合は、筆者が現場に出向くことで受講者が増加しただけでなく、職種を越えた横のつながりができ、和やかな質疑応答の時間ができたことで、さまざまな意見が寄せられ、研修のプログラムの質が向上しただけでなく、各職場の生の声を聞くことが可能となり、調整を行うことで職種間の横の連携やチーム医療としての職種横断的な協力体制を強固にすることができた。また研修の参加者は、日常にも災害時の状況は日常にも起こりうると気付き、真剣に訓練に参加し、職員の危機管理意識の向上がみられた。

災害研修においては、身体で覚えて実践していくことの必要性が大きい。災害時の対応は日常業務の延長線上にあり、日頃行っていないことは、災害時においても実践できない、災害時は状況の変化で全体が見えなくなり、目の前の出来事に目を奪われがちである。「日頃行っていないことは、いざというときにできるものではない」ということをしっかりと認識し、日頃から教育・訓練を怠らないことが大切である。